ランドールの魔女

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ランドールの魔女

【Ｎコード】
Ｎ０４８６Ｙ

【作者名】
若桜モドキ

【あらすじ】
魔法は危険なものじゃない。ずっとずっと綺麗なもの。みんなを幸せにできる、ちょっとした奇跡なんだから。――これは魔法嫌いの町にやってきた、見習い魔女・ミシャの物語。

零話　遠い炎の記憶

それは、どれほど昔の話か。
教会が保有する古い記録にのみ記される、のどかな町の凄惨な事件。
始まりはわからない。ただ終わりだけが伝えられるそれは、町のほとんどを焼き払うほどの災厄だった。そしてそれらは町に住んでいた二人の魔法使いにより、起こされた人災だった。
魔法使い同士のプライドのぶつかりはいつしか町を飲み込む大火となり、勝者も敗者もいなくなった焼け野原――かつての町に戻った生き残りの人々は叫んだ。

――あぁ、魔法などやはり悪魔の力なのだ！

最初に灯った恨みの火は、復興が進むごとに強く輝く。
それはいつしか町に暮らす人々の、共通の信念へと変わっていった。
そんな過去を背負う、メルフェニカ王国ランドール領の小さくも華やかな町に。

「ついたー」

一人の少女がやってきた。
彼女は意気揚々と、事前に連絡をしていた不動産の店に向かう。
これから彼女はこの町で暮らすのだ。その青い瞳にはキラキラとした希望が光り、疲れているはずの足取りも軽い。
住民の中には、見慣れない少女に興味の視線を向けるものもいた。

特に同年代と思われる若者は露骨なぐらいに意味深な目を向け、仲間とヒソヒソと耳打ちしあっている。
それくらいこの少女――アルテミシア・シェルシュタインは、好感を抱く育ちのよさそうな少女だった。長い黒髪をスラリと伸ばし、白と青が基調の衣服はシンプルだが可憐さもある。
上は白いブラウスとベストで、スカートは一番上に硬くポケットがたくさん付いたエプロンのようなものが付いている。その下にはふわりとした白いスカートが、何枚か重なっていた。
足元は皮のブーツ。腰にもぐるりと太めのベルトが、ゆるく斜めにつけられている。
少女の普段着というにはゴツく、旅装束にしては少々ラフな格好の彼女を、住民は好意的に受け止めていた。少女もこの町にやってきてよかったと思っていた。

しかし双方共に、決して小さくは無い『誤算』があった。
それは、この町が国立の魔法学校を有するほどの魔法国である、メルフェニカ王国に属する土地でありながら、国内はおろか世界でも類を見ないほどの『魔法嫌いの町』で。
彼女は適切な教育を受けた『魔女』だったこと。

何も知らない少女は、ようやくたどり着いた店の扉をノックする。
こうして、羽ばたきたての見習い魔女の、新天地での生活が始まった。

一話　新生活は前途多難

穏やかな草原に広い道が敷かれている。道は適度に整備され、人や馬車が器用にすれ違いながら、各々の目的地へと向かっていく。そんな道を集団で進むキャラバンに、彼女はいた。

かたんかたん、と揺れる馬車に合わせて、彼女の黒髪が揺れる。結構な速度で進んでいた集団は、その町の前で停止した。

「……う？」

心地よい振動に半分ほど寝入っていた少女は、身体を大きく揺さぶられてうっすらと目を開ける。頭はまだ寝ぼけたままだが、馬車が止まっているのは理解できた。

確か……次の町が、自分の目的地だったはず。

そこまで思い出した瞬間、意識が一気に覚醒していく。

慌てて馬車から身を乗り出すと、町の住民らしき人と話していた男性と目が合った。

「おや、お嬢ちゃんお目覚めかい？　お目当ての町に着いたよ」

「ずいぶん疲れてたのねぇ。でも今日からはベッドで眠れるわね」

そう言ってにっこりと笑う一組の男女。温和さが服を着ているようなこの二人は、連れ添って何十年にもなるというご夫婦だ。町から町を渡り歩くキャラバンを率いている。

偶然にも拾ってもらった彼女は、おかげでここまで平穏な旅を続けられた。宿にもスムーズに泊まれたし、雇われた傭兵のおかげで野宿も旅路も、この上なく安全安心だった。

「ありがとうございました！」

「いえいえ。修行、がんばってね」

「はい！」

夫人に手を握られ、頭を撫でられる。少女は荷物を引っ張り出す

と、ゆっくりと動き出した馬車の一団に深々と頭を下げた。知り合った子供たちが、こちらを見て手を振っている。
馬車が見えなくなって、寂しさを振り切るように町に入った。

○　○　○

メルフェニカ王国のランドール領は、他国との国境沿いにある物流拠点を抱える、王都から離れた土地ながらも重要な場所だ。町に入ってすぐの広場には、旅人向けの宿が並ぶ。
特にこの町には領主の屋敷があって、もしもランドールを国とすると、この町が首都のようなものだろうか。通過するのみだった王都もそうだが、こういう場所はやはり華やかだ。

「ついたー」

その入り口に立って、アルテミシア――ミシャは大きく身体を伸ばした。
結構快適な旅だったとはいえ、それなりに疲労を感じている。早くふっかふかのベッドで眠りたいなぁ、と頭のどこかが囁いた。あの程度の転寝じゃ、寝足りないみたいだ。
ずいぶんと長かった。ミシャの故郷は他国も他国、海の向こうにある。置手紙一つ残して飛び出してきたが、師匠は心配してくれていると思うが探しはしないと思う。
あの人は、弟子を愛する人だ。だけど弟子の意思を曲げることはしない人だ。
弟子が自分で決めたなら静かに見送ってくれる。それに、出て行った弟子を連れ戻すような時間の余裕など無い。師への弟子入り志願者は、それこそすさまじい数いるのだから。

ミシャが属するシェルシュタインは、魔法使いでもかなりの名門だった。
これまでにも、多くの宮廷魔法師や宮廷魔女を輩出してきている。中でもミシャの師は弟子の選び方がいいのか、それとも教え方がいいのか、『あたり』をよく引くので有名だ。
ミシャの姉弟子もこの国の宮廷魔女をしている。王族方に気に入られ、充実した日々を送っていると手紙に書いてあった。できれば弟子としてミシャを、王都に呼びたいとも。

……だけど、ミシャは有名な一門にあるまじきオチコボレだった。
かの魔女の目利きも時に見誤る、と笑われる程度には、才能の欠如した弟子だった。

魔法が使えないわけではないのだが、シェルシュタイン一門としては論外。師匠や姉弟子はいろいろと気を使ってくれるが、それでも風当たりはそう心地よいものではなかった。
だから飛び出した。
一門の名に頼らずに生きていくために。
姉弟子の世話にならないために。
それでもシェルシュタインを名乗るのは、赤子で捨てられていたミシャにはそれ以外に名乗る名が無いから。アルテミシアという名前も、育ての親である師匠がつけてくれたものだ。
まぁ、魔法使いの家名など、同業者にしかわからないだろう。わかったところで、どうということも無い。血統と違って一門は師弟関係で繋がる。だからシェルシュタインを名乗っている魔法使いは世界中に、たぶんかなりの数がいるだろう。弟子の弟子の……という具合に。
ミシャはただ、その中の一人になるだけだ。
才能に恵まれなかったから、そう目立つことも無いだろう。
だいぶ前からひっそりと準備をし、ミシャは今日という日を迎え

た。
「えっと……確かこっち、だったはず」
地図を手に目指しているのは、この町の不動産を扱う店だ。旅に出る前にてこの町に引っ越したい、という内容の手紙を送ってある。何日も前にここに到着している……と思う。
後は不動産の店で住む家を紹介してもらい、そこに移動するだけだ。一応、それなりのたくわえがあるので、多分そこそこの家、もしくは部屋を紹介してもらえると思う。
しばらく道を進んでいると、ようやく目当ての店を見つけた。
看板が出ているから営業中のようだ。

「ごめんくださーい」

ノックをしてから扉を開けて中を覗く。カウンターに初老の男性がいた。どこか難しい表情で新聞を読んでいた男性は、店を覗くミシャに気づくとにっこりと笑みを浮かべる。
営業スマイルではあるのだろうが、温和そうな人のいい笑みだった。
ミシャはかばんを床に置き、両手を前でそろえて姿勢を正す。
「えっと……事前に連絡していたアルテミシア・シェルシュタインですけど」
「えぇ、覚えていますよ。ずいぶん早い到着ですね」
「キャラバンにくっついてきたので」
「あぁ、なるほど。それは運がようございましたな」
店主はいくつかの書類を棚から引っ張り出す。そう広くは無い店内には家を描いた絵がたくさん飾られていて、中には町で見かけた感じのものもあった。
「とりあえずは家ということでよろしいでしょうか。何かご注文はありますかな？」
「大きな鍋が置けるところがいいかなぁって」

「……鍋？」
「触媒合成とかに使うので……その、わたし魔女ですから」
見習いですけど、と苦笑するミシャ。
本当はシャレにならないほどのオチコボレなのだが、それを言っても仕方ない。しかし危険なことはしないと誓える。危険な事態になりかねないような魔法を使う、設備も物資もない。
「あ、でも大丈夫です。わたしの専攻は【青色魔法式】なので、爆発とかは――」
「……帰ってくれ」
「は、はい？」
無言になった店主に説明したミシャに、返されたのは低い声だった。カウンターから出てきた店主は、ぐいぐいと背中を押してくる。あっという間にミシャは店からたたき出された。
地面を転がるように移動し、振り返ったミシャにかばんが投げつけられる。
「ちょ……な、何するんですか！」
「魔女なんぞに貸し出す家も部屋も空き地もない！　町から出て行けっ！」
怒りの感情をそのまま叩き込んだように、扉は大きな音を鳴らして閉ざされた。地面に座り込んだまま唖然とする彼女の耳に痛いほどの静寂が刺さり、次の瞬間には連鎖する音が響く。
ありとあらゆる扉と窓が、一斉に閉ざされていって。
「な、なんなの……？」
ミシャの口からこぼれる問いに、徹底的な拒絶だけが返された。

二話　救いの手

あれから数時間――ミシャは教会にいた。
むしろ、教会にしかいることができなかった。
公園らしき場所では子供に逃げられ、親らしき大人に砂を投げられた。道を歩けばジロジロとぶしつけな視線を向けられ、反応すると殺される呪われるとぎゃあぎゃあ騒がれた。
それを聞きつけた人々がミシャを取り囲み、そこから必死に逃げて。
夕方になって、やっとここにたどり着いたのだった。
時間のせいか人が少ないここで、ようやくミシャは休息を取れたのだが。
「あなた、ランドールの話を知らなかったんですか」
「はい……」
応対してくれたのは、ここの教会を管理する司祭ネール。
年齢はずいぶんと若く、ミシャより少し年上のお兄さんという感じだ。薄茶色のやわらかそうな髪を、少しだけ長く伸ばしている。あと数ヶ月放っておいたら、軽く結えそうな感じだ。
彼に淹れてもらった紅茶を飲み、ミシャは聞かされた話を頭の中で繰り返す。

焼け野原から必死に復興したこの町の歴史。
原因となり、いずこかへと消えた二人の魔法使い。

全ての土地で魔法が受け入れられる、なんて思ったことは無い。だけどまさかこのメルフェニカで、これほどまでに嫌われているなんて思いもしなかった。
魔法学校がある国で、物資が手に入りやすそうだったからランドールに来たのに。

「あなたの目論見は間違いではありません……が、あなたのスキルが問題だっただけです」
「そう、ですね……」
それからミシャの調査不足もある。
自分の都合で選んだ町の『都合』を、少しも考えなかったこちらの落ち度だ。
「まぁ、この町のことはあまり知られていませんし、あまりご自身を責めないように」
「はい……」
「それより、あなたはこれからどうするんですか」
「どう、とは？」
「故郷に戻られるのか、それとも別の町に移動するのか」
すぅっと、ネールの灰色の瞳が細められる。
冷たい視線に、ミシャは俯く。教会に属する人の中には、魔法を嫌っている人も少なくないと聞いたことがある。なのにこんなところに逃げ込んだりして、この上ない迷惑だろう。
「誤解される前に言いますが、私個人は魔法使いに悪い印象はありませんよ。ただ住民が駆け込んでくるのはうちですからね。……こちらにも、いろいろと事情がありまして」
「……えっと、その」
希望に満ちて故郷を飛び出して、現地到着と同時に逃げ帰る。現実的に考えればそれしかないのはミシャにもわかっていた。だけども、心のどこかがそれを拒否している。
できるだけ、この場所でがんばってみたい。
けれど、留まろうにもまず住む場所が手に入らなければ。あの様子だとミシャの存在や容姿は町中に知れ渡っていて、宿も門前払いだろうし。町から出るだけでも大変そうだ。
やっぱり一度、帰るしかないのだろうか。
小さくため息が零れる。
無意識に手を伸ばした紅茶は、すっかり冷めていた。

視線を上げると、ネールは変わらずミシャの前に座っている。
外はさっきより少し薄暗くなってしまって、時間の経過をミシャに教えてくれた。
「あああ、あのその、すみません。えっとその、あの」
「まぁ、どうしてもランドールにいたいなら、近くの山の小屋でも貸しましょうか？」
「小屋ですか？」
「えぇ。もう長らく使っていないものですが、一通りの家具はそろっていますし、特に何かを買い揃える必要は無いと思いますよ。あの山はこの町の住民も、ほとんど入りませんしね」
「い、いいんですか？」
「神は困っている人を見捨てません。それが何であろうとも」
今日はここに泊まっていくといいですよ、と彼は少し微笑み、立ち上がる。ついて来い、ということなんだろうか。ミシャは慌てて荷物を抱え、彼についていこうとして。
「あ、あのぅ……鍋って、ありませんか？」
申し訳なさそうに、そう言った。

○　○　○

次の日、ネールの手引きでミシャは町から脱出。
昼前には山小屋に到着していた。
話に聞いて抱いたイメージよりも、結構きれいな感じでミシャは驚く。
最低限の家具はあり、ただ生活するだけなら不自由は無いだろう。問題は食料だが、小屋の傍に小さな庭のような部分がある。ここを

畑にすれば問題ない。
種は森の中で探すか、街道までいって商人から買うという道もある。家も部屋も手に入らなかったので、お金には余裕があった。もっとも、あまりうれしくない余裕なのだが……。

「よーし、がんばるぞー」

ゴトンと床に置くのは大鍋だ。底は深く、横にも広い。その中には古びた調理器具と、袋などに入った調味料などが入っている。教会でいろいろと分けてもらったのだ。
この大鍋は昔、祭りなどでの炊き出しで使っていたという。
もう使うことも無いからと、タダ同然で譲ってもらってしまった。家まで用意してもらった上に無償はさすがに申し訳ないので、お布施ということでいくらか寄付をした。
荷物の仕分けは後でするとして、まずは――。
「鍋の置き場と、作業台を作らなきゃ」
小屋は今後使う予定もないし、おそらく魔女が住んだということで誰も使わないから好きにしていい、とはネールの話。一応は貸し出しなのだが、ほとんど譲渡されたようなものだ。
ミシャは調理器具などを鍋から取り出し、台所スペースにとりあえず並べていく。それからかばんから赤い液体の入った小瓶、さらにいくつかの鉱石と石材を取り出した。
それらを鍋の中に放り込み、部屋の中を見回し。
「よし……ここにしよっと」
選んだのは部屋の中央の壁際。ドアの真正面だ。
さすがに部屋のド真ん中は邪魔だろうから壁際にする。大鍋を好みの位置に置くと、ミシャは鍋の中で転がっている小瓶の封を切って、中の液体を鍋の中に注いだ。
次にかばんから引っ張り出したのは、無色透明の結晶だけがついた銀色の鎖。握るのに最適な大きさの結晶の中央には、ほのかに白

い光が灯っている。
それを鍋の上に掲げて、ミシャは小さく呟いた。
「――【赤色魔法式】展開」
その声に答えるように、鍋の中から光があふれ出す。それが引く頃には、穴こそ開いていないがさびて使えそうにない大鍋は、曲線の文様が描かれた新しい鍋へと姿を変えていた。
さらにはきれいな石造りのテーブルまで出現している。
ミシャが腕を広げても両端に届かない、かなり大きなものだ。
「上出来、かな」
ミシャは軽くなった鎖を見て苦笑する。そこにぶら下がっていた結晶は、跡形も無く消え去っていた。彼女が使った【魔法式】の代償として、鍋の中身と共に消えてしまったのだ。
安くはない一品だったが、仕方が無い。
「次は……」
ミシャはかばんからまた鉱石と、液体入りのビンを取り出す。
作業は、遅くまで続いた。

三話　森の行き倒れ

ランドールについて三日ほど経った。
ミシャの朝はそれなりに早い。
まだ薄暗いうちからベッドを出て、朝食の準備を始める。
昨日のうちに汲んできた水で料理用の鍋を満たし、拾い集めた木の枝を突っ込んだかまどに魔法で火をつける。干し肉を適当にちぎって、その中にポイポイと放り込んだ。
味付けは塩と胡椒であっさりと。

「さてと、準備おっけい」

手を洗ってからさっと着替える。
これから今日と明日の朝使う水を、近くの川まで汲みに行く。まだ冷たいスープが煮えるまでの時間の有効活用だ。小屋の中にある樽がいっぱいになるまで、何度か往復するだろう。
髪も手櫛で適当に整え、バケツを持って出発だ。旅の間、荷物を入れておいたかばんも忘れない。何か使えそうなものを見つけたら、これの中に押し込むためだ。
それが終われば食事をし、拾ったものがあればそれを仕分けする。薪は外において乾かさないといけないし、触媒に使えそうならより使いやすく加工しなければいけない。
そう、そろそろ魔法の修行もしなければいけないのだ。
一応は、それが目的なのだから。
触媒合成に使う鍋と作業台はできたし、ボロボロだった調理器具やキッチンも昨日の大掃除でだいぶきれいになったと思う。本音を言えば次はベッド周りだが、これは後回しにしよう。
それよりも先に、畑を何とかしなければ。
種は――ひとまず、ネールに調達してもらうことになっている。

幸い、教会には小さな菜園があるらしく、そこで余ったものをわけてくれるそうだ。
何から何までお世話になりっぱなしで、だんだんと申し訳なくなってくる。
ネールに何か恩返しをしたいと、ミシャは思うのだが。
「魔法じゃ……迷惑になりそうだなぁ」
作業台を眺め、呟いた。
先日、魔法で作り出した作業用のテーブルには、所狭しと瓶が並んでいる。手のひらにすっぽりと収まるほどの小瓶が十数個と、かなり肉厚でずっしりとした大きさの大瓶がひとつ。
大瓶は青の、小瓶はいくつか空のもあるが、ほとんどが青と緑の液体入りだ。

このカラフルな液体は、魔法に必要不可欠な『魔素』。

魔法の基本たる【五色魔法式】を筆頭に、ありとあらゆる魔法に必要なものだ。
五色とは、赤、青、緑、白、黒の五つ。土は赤で、草は緑で、水は青。鉱物は赤であることが多いが、石の色によっては違う場合もある。白や黒に属する触媒ははあまり多くない。
触媒だけではただの石で、ただの水で、ただの草。しかし魔素を付け加えることで、鍋を真新しいものに変え、テーブルを作り出すことだって不可能ではない。
魔法式の理論的につりあう魔素を用意できれば、何でも触媒に変えられるのだ。
一つだけ問題があるとすれば、触媒はそこらの石ころで大丈夫なのに対し、魔素だけはそう簡単にはいかないというところだろうか。基本的に、魔素はお金を出して買うものだ。
自然界には存在しない、というより自然界に存在するが数が少ないものを人工的に作り出したもので、大規模な施設を所有でもして

いない限りは売られているものを購入するしかない。
現在、ミシャがストックしている魔素の量は、そう多いとはいい難かった。
大瓶がひとつ残っている青はいいのだが、それ以外は厳しい。
町に住むことができれば、魔法を生業に収入を得ることもできただろうが……。

「……やっぱり、引っ越すしかないのかな」
つぶやきながら、ミシャは家を出た。

○　○　○

教会で過ごしたあの夜、ミシャはネールに頼んで図書室に案内してもらった。寝付けそうになかったので、せっかくだから町の歴史を学ぼうと思ったのだ。
ランドール領はあの町以外にも街道沿いにいくつか町や村があるそうだが、基本的にランドールの町といわれる場合はあの町のことを言うのだという。
領主の屋敷を抱えている、ここが国ならば王都のような場所なのだそうだ。
なのであの町の名前もランドールというらしい。ほかにも知らなかったランドールの、歴史や慣わしなどを知っていくうち、ミシャの気分は少しずつ沈んでいくようだった。
ミシャがランドールを選んだのは、ある意味では直感だった。地図を眺めていて、なんとなく気に入った響きだったから、というのが最初だったように思う。
それからメルフェニカ王国のことを知り、姉弟子もいるし、街道沿いだからものも手に入りやすかろうというだけで、彼女は一人立

ちするための土地をランドールに選んだのだ。
やはり、それがまさかのこんな事態。
自業自得とはいえ、ツイてないにもほどがある。

「ほんと、どーしよっかなぁ」

がこんがこんと木製のバケツを揺らしミシャは歩く。
予定外の事態で資金だけなら、かなり余裕があるといっていい。
だが収入を確保しないといずれ枯渇する水源だ。別の場所を探すか、一度故郷に戻るべきなのか……まだ迷っている。
物心がつき始めるころから、ミシャの世界はシェルシュタインだった。
それ以外の場所を知らず、魔法だけで満ちた世界に生きてきた。

――初めてだった。
誰も知らない場所に来たのは。シェルシュタイン一門以外の人と、接したのは。だから未練がある。まだ足掻きたい。せめて一ヶ月。いやもっと長く。……そんな風に葛藤している。

でもその一方で、心の一部はもう諦めている。
あれだけの反応を示されて、それでもがんばれるほどミシャは強くない。町に刻まれた傷跡の前では、ミシャなど存在しないにも等しいほどちっぽけだ。
にもかかわらず、魔女の襲来という言葉は、町の人々を苦しめる。

――じゃあ、ここにいる意味なんてないじゃない。

そんなことを思いながら、バケツの中を水で満たす。山頂あたりに水が湧き出している場所があるらしく、川の水量はかなりある。冷たくて、透き通ったおいしい水だ。

八分目ぐらいまで汲んで、小屋に戻る。どうせ往復するのが前提なのだから、無理をする意味は薄い。仮に足りなくなったなら、また川に向かえばいいだけの話だ。

「枝、落ちてこないな……」

木々を見上げて呟く。せいぜい煮るぐらいしか調理方法がない現状、薪の枯渇もまた死活問題といえた。それに温暖な時期になったとはいえ、水で身体をぬぐうのはまだつらい。

そういえば小屋の隅に鉈があった……気がする。

あれで枝を直接切り落とそうか。拾いにいく範囲を広げるのもいいけれど、それだと他のことができなくなってしまうし、遭難でもしたらそれこそ天国に一直線だ。それなりに人の手が入った山のようだが、時々獣の咆哮も聞こえるし……安全とは言いがたいだろう。

小屋の周囲に、獣よけの魔法式をかけておいた方がいいかもしれない。

「たぶん、魔よけの応用だから――」

ブツブツ呟きつつ魔法式を組んでいると、近くでガサガサという音がした。草をなぎ倒すような、踏みしめるような、木の枝を揺らしたような。そんな葉と葉が擦れあう音だ。

思わず手にしていたバケツを落とす。

水が地面をぬらし、バケツはころころと転がった。

ミシャはぴくりとも動けずにいた。傍目には息を殺して周囲をうかがっているように見えるかもしれないが、ただ恐怖で息が細くなって、緊張で身体が石のようになっているだけだ。

仮に身体が動いたところで、腰が抜けているか、足が震えて歩けもしないだろう。そんな有様の中で、視線だけは過剰なほどに周囲を、きょろきょろと見回していた。

獣だろうか。

それとも違う何かだろうか。

動かないと襲われてしまうだろうか。むしろ、動く方が危ないだろうか。

「……っ」
ミシャは歯を食いしばって、身体ごと音がした方を向いた。
それは、ミシャがいた場所から見てちょうど山の頂上の方角。上から転げ落ちてきた、という感じの音だった。獣か、モノか、それ以外か。……確かめなければわからない。
少し周囲を見回して、ミシャはバケツを拾った。
……これでも、振り回せば武器の代わりになるだろう。
ゆっくり、ゆっくり、音がした茂みに近づく。
ひざを地面についてさらに進む。
できる限り静かに茂みを掻き分けて、そっと覗き込んだ先。

「……え？」
そこには――人が、落ちていた。

四話　治療

それは、小屋に住み着いた次の日の話。
わざわざミシャの様子を見に、ネールが尋ねてきたことがあった。

「……ずいぶんと、きれいに整えたものですね」

小屋の中を見たネールの第一声はそれだった。
どうやら何度か入ったことがあるらしい。
「やりすぎ……ました？」
「……いえ、別に」
どうせ使わない場所ですから、とつぶやくネール。
それからの流れは、お茶を入れて、町の様子を尋ねたぐらいだろうか。そして、あまりのないようにミシャの心は、若干粉のように砕けていた。
忌み嫌われているであろうことは、さすがに予想していた。
覚悟もあった。
だが。

「まさかの……バケモノ扱い、ですか」

肌は浅黒くしわしわで、杖をつく腰の曲がった老婆。長い髪を振り乱し、自らに異を唱えるものには災いとのろいを振りまく魔女。
……それが、町に流れる『魔女』のイメージだった。
老婆のような魔女だが、その気になれば大人の男性でも片手でひねり殺すこともできる怪力を発揮し、ドラゴンに姿を変えて町はおろか国すらも焼き払うという。
「あの……バケモノっていうか、まんま伝承の悪魔そのものという気がしますけど」

「魔法使いが町に来たのは、おそらく例の事件以降初めてですしね。住民の中では魔法と悪魔がイコール結ばれていますから、そういうイメージと噂になっても致し方ないでしょう」
と、ネールは涼しい顔をしているが、さすがにバケモノや悪魔扱いはショックだ。噂は今も尾ひれを増やしつつあり、教会にあれこれと相談に来る若い母親も多いという。

「ちなみに理由は、魔女がわが子を生贄に――」
「あーあー、もういいですー！」

説明を聞くのも疲れ果て、ミシャはテーブルに突っ伏した。想像以上の騒動に、必死に立て直しつつある心も粉砕されそうになる。今すぐこの現実を夢にしたくなった。
そんな感じにいろいろと情報交換をしたのだが、ネールは意外にも魔法使いのあれこれに詳しいらしく、ミシャがシェルシュタイン一門と知るとかなり驚いた様子を見せた。
シェルシュタイン一門が暮らす土地は遠く、そこから出ている魔法使いのほとんどがどこかの城仕えだったり、名のある貴族に雇われていたりするからだろう。
「あなた、本当にシェルシュタインなんですか……？」
「恥ずかしながら……」
「……そう、ですか」
驚いているというより、半ば疑っているような感じだった。
信じてもらおうとは思わないし、それを証明するだけの実力もない。一応、シェルシュタイン一門の紋章が入った、懐中時計なら所持している。師と師弟関係になった証の品だ。
なぜ懐中時計なのかは知らない。
聞いた話ではかつて『時間を操作する魔法式』が存在し、それを編み出したのがシェルシュタインの名を持つ魔法使いだった……とのこと。真偽はわからない、魔法使い界隈の伝説だ。

そんな話にあやかってなのか、弟子に時計を贈る習わしになったらしい。
「とりあえず、また様子を見に来ますよ」
そういって彼は去っていった。

――次に会った時、ミシャはたずねたいと思う。
どうしてこんなにも親身になり、見返りもなく助けてくれるのか。
でも今、それにもうひとつ用件がついた。
「……どうしよう」
若干引きずりつつも、どうにか小屋までつれてきた『行き倒れ』。
ぱっと見はミシャより上の、ネールと同じぐらいの青年だ。それなりの家柄なのか、上等そうな服を着ている。ただ、かなり着崩しているから、粗暴さが強く感じられた。
目をとしているから瞳の色はわからない。
茶色の髪は結構長く伸ばしてある。ランドールの町でも見かけたし、旅の間もよく見かけたよくある若者という感じだ。人のことは言えないが、山の中にいるような風貌には見えない。
事情も何もかも、彼が意識を失ったままである以上、何もわからないのだけれど。彼が意識を取り戻せないほどのケガをしていて、早く治療しないと危ないことだけはわかっている。
さっと見たところ、左足にひどいケガがあった。木の枝か何か、もしくは石などで抉れた切り傷のような傷口。刃物でついたものではないのは、そのギザギザした痕跡でわかる。
他は些細な擦り傷だから、治療するまでもなく勝手に治るだろう。
「まずは消毒しなきゃ……」
水を桶にいれ、布を浸す。泥で汚れた顔などをぬぐう。
かすかにうめく声が、彼がまだ生きていることを教えてくれた。
太ももの中間あたりにぱっくりと開いた傷口の少し上から、ハサミで洋服を切る。自分よりずっと体格のいい、意識を失った相手の服を脱がせるほどの腕力は、ミシャにはなかった。

あらわになった傷口を布でぬぐい、赤くなったそれを桶の水に浸す。
あっという間に水は赤く染まっていった。
次にミシャは壁につるしてある草――薬効のあるハーブと、緑の魔素を手に取る。テーブルの下から即席の道具を取り出し、魔法の力で効力を高めた薬を作り始めた。
本当は医者に見せた方がいいのだろうけど、そんなヒマはない。
今はできることをやるしかなかった。

○　○　○

魔法は万能なものではない。
ヒトが作り出した技術だからこその限界がある。
特に治癒系統の魔法式は、素材の効能を高めるぐらいしかできない。
あるいは、傷が治るまでの時間を短縮するぐらいだろうか。
火薬が生まれたことで、特に火を作る攻撃系統の魔法式が発展したように、いつか治癒系統も劇的な力を持つのかもしれないのだが、今はまだそこに至るだけの触媒は存在しない。
ただ、コツがあった。
魔石を使えば更なる効能を得られるのだ。
元々、魔法に使われていたのは『魔石』という結晶だった。精霊から放出された彼らの力が形になった、無色透明の結晶だ。飲み込めるほどの小粒の石であることが多い。
ミシャが大鍋を直しテーブルを出現させたときに使った、無色透明の結晶。あれはかなり大きい方の魔石だ。そう見つかるものではないので、買うとしたらかなりの値がつくだろう。
以前、姉弟子からプレゼントされたので、正式な値段は知らない

が、知りたくもない。おそらく別のことに使ってほしかったのだろうし、ミシャでは手も届かないほど高額だろうし。
ただ、小粒なものは結構頻繁に見つかるので、魔素ほどではないが手ごろだ。それでも使いまくれるほど見つからないので、魔素という便利なものが作られたのだが。
「んしょ……」
ごりごりごり、とすり鉢から音がする。
傷口に直接塗りこんで魔法式を展開するために、魔石を追加しているのだ。魔石も魔素も人体に悪いものではないので、魔法の触媒として使わなくても充分薬として使えるものだ。
とはいえ、さすがに石のように硬いものをすり潰すのは、なかなか体力を使う。
手のひらは痛み、額には汗が滲んでいた。けれどミシャにはこれしかない。これ以外に彼を助ける術がない。体重を乗せ、ごりごりという音を立てて、魔石を粉々にすり潰し続ける。
そうしてようやく出来上がった緑色のペーストを、傷口に丁寧に塗りこむ。
それが染みるのか、青年が顔をしかめてうめき身をよじろうとした。
「じっとしてください……！」
意思のない相手に言ったところで仕方ないが、それでも声は聞こえているのか青年はおとなしくなる。その隙に、残りのペーストで傷口を埋め終わる。

「――【緑色魔法式】展開」

傷口に手のひらをかざし、呟く。
身体の中から何かが吸い出されていく感覚がある。
吸い出すというよりも、引きずり出される吐き気のような感覚かもしれない。これはミシャの中の魔力と呼ばれる力が、対価として

失われていく感覚だ。
魔法使いとしてのわかりやすい優劣基準の一つが、生まれ持った魔力という力の量。いかなる類の魔法でも使ったら使った分、術者はそれに似合う量の代償を失わなければいけない。
保有する魔力の量が多いほど、魔法を使える回数が増えるのだ。
その魔力は魔法に使われているというよりも、展開された魔法を安定させるために使っている感じなのだと、ミシャは以前、何かの書物か師の講義で見聞きした気がする。
特に魔石を使った場合、失われる魔力の量はかなりのものになるという。魔法の効力が増せば不安定さ同時にも増してしまい、それを支えるために力をより使ってしまうのだそうだ。

「……ふぅ、これでよしっと」

しばらくしてミシャは腕を下ろす。
傍らに用意してあった二種類の、細く咲いた布のうち、わずかに色がついた方を足にくるくると巻き始めた。薬湯を染み込ませた即席の包帯で、傷を悪化させるばい菌避けのためだ。
次に白い方を巻いていく。きつすぎると血の流れが悪くなってしまうので、適度に緩くした方がいいという話を聞いたので、解きやすいように、でも外れないようにきゅっと結んだ。
念のために下熱効果のある薬湯を飲ませ、傍らで様子を伺う。
後はどうなるか、天に委ねるしかない。

五話　目覚めの抵抗

何かが動く気配で、ミシャの意識が覚醒していく。

「う……？」

室内は明るく、かすかに鳥の鳴き声が聞こえた。うっすらと開けた視界には、自分ではない誰かの身体の一部が見える。どうやらベッドの端に、つっぷすようにして眠っていたらしい。

寝起きでかすんだ頭で、例の行き倒れの青年の様子を見る。

夜はあまりよくなかった顔色は、少しだけだがよくなっているように見えた。すやすやと寝息を立てている。この様子ならもう心配はなさそうだった。

「……よかったぁ」

思わず呟き、慌てて口を手で押さえる。せっかく眠っているのだから、起こしたりしたら申し訳ない。こういう時は、じっくりと眠らせてあげるべきだろう。

ゆっくりと立ち上がって、ミシャは小屋の外に出た。

夜中に雨でも降ったのだろうか。地面がしっとりと濡れている。空気中の汚れが雨にぬぐわれて空気が綺麗だ。遠くの山の向こうから登りつつある朝日も、ずいぶん違って見える。

空に雲はなく、今日はよく晴れそうだ。

「んー」

大きく身体を伸ばしたミシャは、いつものように朝食の準備を始めた。

もちろん青年を起こさないように気を使い、静かに。

確か干した豆があった。今日はあれをじっくりと煮込んだスープにしよう。クタクタになるまで煮込んだらやわらかくなっておいしいし、ケガ人の弱った身体にも優しいだろう。

いつものように鍋に水をいれ、豆をいれ、火の上におく。
そして水を汲むために、バケツを抱えてそっと小屋を出た。昨日のアレで水をかなり使ってしまったし、今日も昨日ほどではないにせよいつもより使うことになるだろう。
ケガの手当てなど経験は浅いが、彼は数日は動けないと思う。
「そろそろ目を覚ましてくれるといいなぁ」
呟きつつ、帰路に着く。
このときのミシャはまだ、この後の大騒動を知らない……。

○　○　○

小屋に近づくと、何やら奇妙な音がしていた。
何かを引きずるような――這うような、ズルズルという感じの音だ。
「……？」
邪魔にならないところにバケツを置いて、扉をそっと開く。音は、やはり小屋の中から聞こえてきた。もしかすると、青年がようやく目を覚ましたのかもしれない。
安堵の息を吐き、ミシャは笑顔で扉を開いた。

「あの、目が覚め――」
「俺をどうする気だこの魔女め！」

出会い頭に罵られた。
ミシャの笑顔がピシっと凍りつく。
そこにはまだうまく動かない身体で必死に這う、あの青年の姿があった。軋むほど歯を食いしばり、戸口で固まってしまったミシャを、刺し殺さんばかりに睨みつける赤茶色の瞳。

獣のように床に爪を立て、彼は出口を目指して這いずる。
ミシャを魔女と罵ったということは、彼は町の住民なのだろう。
改めて、町の人々が抱く魔法や、それを扱う者のイメージの悪さを痛感した。やっぱり自分はここにいちゃいけないような気がして、胸の奥のほうがチクリと痛む。

「――って、動かないでくださいっ」

しばらくの思考停止から復帰したミシャは、すぐさま青年に駆け寄った。
別に罵られてもかまわないが、彼を今、動かすことはできない。
「ケガは応急処置しかしてないんです！　ヘタに動いたら開いちゃう！」
「うるさい！　魔女なんかに助けられるぐらいなら」
「死んだほうがマシとかいうなら、魔法で無理やり縛り付けますよ！　あらかじめ言っておきますけど、わたし【呪術式】は完全に専門外ですから、どうなっても知りませんからねっ」
「こ……やっぱり魔女は邪悪だ！　悪魔だ！」
「あなたが暴れるからです！」
必死に押さえつけて、動きを封じる。
相手は幸いにも薬とケガのせいで、身体がうまく動かないケガ人だ。疲れたところに、睡魔を呼び起こす魔法をかければ、ひとまずおとなしくさせられる。
本当はそんなことをしたくないけれど、彼の命を救うためにはやむをえない。
ここから町までは結構ある。ミシャにはどうしても、こんな状態のケガ人が町にたどり着けるとは思えない。ケモノに襲われるか、遭難する可能性の方がずっと高いように感じる。
確か、麻酔効果のある草をどこかに置いたはず。
ミシャは青年を押さえつけつつ、部屋の中に視線をめぐらせて。

「は、な……せっ」
その隙をつかれ、振り払われた。
部屋の、ベッドがある方へ転がらされ、壁に身体をうちつけた。
「……ったぁ」
痛む箇所をさすりながら、ミシャは青年の姿を探す。
彼は開けっ放しだった戸口に、その指先をかけていた。
「もうっ、わからずや！」
ミシャは作業台に駆け寄り、無造作に置かれていた草を掴む。次に、緑の魔素が入った小瓶をスカートのポケットから引っ張り出した。小瓶のふたを口で引っこ抜いて、草にまぶした。
強引な手段だが、もう選んでいる時間はない。
ミシャの様子に青年が振り返り、その顔に驚愕の色を浮かべた。
ちょっと待ってくれ、とかいう声が聞こえるけれど、ミシャはあえて無視をして。
「ケガ人はおとなしくベッドで、寝てればいいんです……っ」
寝かしつけたら手足を拘束しよう。治るまで、この小屋から一歩も出さない。徹底的に直してからたたき出してやる。……そんな感情を込めて、ミシャは手の中の草を握り締めた。
後はこれを投げて、魔法を使うだけだ。
「お、おい……マジかよ！　この鬼畜！　魔女！　悪魔！」
身体をひねって草を握る右腕を後ろに振り、おろおろする青年に狙いを定め――。

「やれやれ、あなたは子供ですか、リオ」

投げつける前に、聞き覚えがある落ち着いた青年の声がした。強引に腕を止めたのでかすかに身体に痛みが走り、変な体制のままミシャはまた固まってしまう。

もしミシャの記憶が確かなら、今の声は間違いなく……。
「聞き覚えのある、実に情けない声が聞こえると思ったらあなたですか」
呆れが滲む声とため息。枝を踏む乾いた音。
そこには、荷物を抱えてこちらに向かってくる、ネールの姿があった。

六話　司祭のはかりごと

「……どうぞ」
少しデコボコした金属のカップに紅茶を入れて、差し出す。
椅子に座ったネール。ベッドに腰掛けた例の行き倒れ――リオという名の青年。ミシャは二人に交互に視線を向けるが、ネールはリオを見て、リオは壁を睨むので視線は合わない。
「あのぅ……」
「はい」
「事情を、誰か……」
「魔女は何も知らなくていいんだよ、さっさとどっかいけ」
「……そこのバカはリオ・カーティス。私の、幼馴染というヤツですね」
ネールはまったく気にせず、勝手にリオの名前をミシャに語る。
何となく、二人の力関係がミシャには見えてきた。たぶん、それは指摘するまでもなく当人たちにもわかっている。だからこそ、リオはネールに不満そうな目をジトリと向けている。
「勝手に説明すんな。魔女に名前を知られたら呪われるんだぞ」
「え、無理ですよそんなの」

呪いというからには、おそらく【呪術式】のことなのだろう、とミシャは思う。これはかなり計画を立てて実行するもので、普通の【五色魔法式】と比べていろいろと面倒くさい。
たとえば普通だとそこらの石ころや土、水でも触媒にできるが、【呪術式】となるとそれ相応の触媒が必要だ。相手を特定しない場合はいらないが、標的の身体の一部も求められる。
一般的には髪の毛を使うが、体液のほうが望ましいと書物にはあった。
通常の魔素では、それこそちょっとした湖ほどの量が必要で、つ

まりは魔石を使うことが最低条件となる。術者にもそれ相応の能力も求められるし、生半可な魔法使いではダメなのだ。
さらに数日ほどかかる上に、種類によっては本当に悪魔と呼ばれる類の精霊に願い、力を貸してもらうので、それなりにしっかりとした『儀式場』も必要なのだ。

「……って仕組みなので、罵られたぐらいで呪ってたら破産しちゃいます。金縛りぐらいならパっとできるんですけどね。それなら触媒も手ごろで、黒の魔素だけでいいんですよ」
「お前、バカだろ。誰も呪い方なんて聞いてねぇし」
「だ、大丈夫ですよ！　わたし、リオさんのこと嫌いじゃないですから！」
「そういう話でもねぇよ！」
「よかったですねリオ、失礼なあなたを嫌いじゃないそうですよ」
「お前も黙れ。むしろお前が黙れ。つーか、魔女に好かれてもうれしくない」
「じゃあ嫌われたいのですか」
「だから、そういう問題じゃねぇ……」
がっくりとリオは肩を落とす。
……何か間違ったことを言ったのだろうか、とミシャは首をかしげた。気軽には呪えないということと、罵られたけど覚悟はしていたから嫌ってはいない、と説明しただけなのだが。
難しいなぁ、とミシャは心の中でつぶやく。
やはり魔法使いの世界と、普通の人の世界にはズレがあるのだろうか。
これから普通の人の中で生活するなら、そのズレを把握し、慣れなければいけない。
「まぁ、とりあえず今後のことを話しましょうか」
「魔女を追い出す方法か？」
「アルテミシアさんは、ランドールで暮らしたいのでしょう？　だ

ったら、いい方法がないこともないです。いろいろと苦労するかもしれませんが、正攻法ですよ」
リオを完全に無視して、ネールは笑う。
はい、とミシャは答えた。せっかく選んだ新しい場所。ほかにいくアテもないし、ここで暮らせるなら多少の苦労も厭わない。それくらいの覚悟は決めて、故郷を飛び出している。
しかし、ネールが笑顔とともに告げた『正攻法』は、意外すぎるものだった。
「よろしい。ではまず、領主の館に行きましょうか」
「はい？」
「な……っ」
「私から話を通せば、きっと会ってくれるでしょう」
まるでちょっと散歩に行くぐらいのノリで、彼はそう言った。

○　○　○

山のふもとにミシャとリオはいた。
町に入る手はずを整える、とネールは一足先に山を下り、ミシャはリオを支えつつふもと彼を待っているのだ。リオは木陰にすわり、ミシャはその隣で読書をしていた。
「……それ、何の本だ？」
「薬学の本です。薬草の種類とか、その効能とか」
メルフェニカ王国についてすぐに、ミシャは本屋に入り、そこでメルフェニカに自生している薬草などがしたためられた、魔法使い用の書物を購入していた。
今読んでいるのがまさにその本で、ざっと目を通しただけでも故

郷とだいぶ異なっていることがわかる。毒草との見分け方も載っているので、しっかり覚えないといけない。
万が一にも間違ったら大変だ。特に故郷で広く使われている薬草に、恐ろしいほどそっくりな毒草があるようなので、しばらくの間は本を片手に山をウロウロすることになるだろう。
ちなみに、リオに使ったものは故郷から持参したものだ。何があるかわからないので、他にもいくつかの薬草やハーブを持ってきている。……まぁ、ほとんど使ってしまったが。
「……にしても、遅いな」
「ですね」
ネールが町に戻ってから、どれくらい立っただろうか。空が若干赤みを帯び、夕方と呼んで差し支えなさそうな雰囲気が漂い始めている。何かあったのか、と心配になってきた。
立ち上がったミシャは遠くに目を凝らし、こちらに向かってくる人影に気づく。
まもなく、それがネールだとわかった。

「すいません、遅くなりました」

彼はなぜか数人の男女を伴っている。服装からして教会の関係者のようだ。彼らはリオを担ぐか何かするためなのだろうか。だがそれだと、あんなに人数は必要なさそうだが。
「少々手違いがありましてね、準備に手間取りまして」
「手違い……ですか？」
「えぇ。それで申し訳ないのですが……」
と、ネールが視線をそらす。それと同時に彼が連れてきた一団が、それぞれに縄やら何やらを手にミシャをぐるりと取り囲んだ。さすがのリオも、不穏な様子に驚きを見せる。
「あの、あの？」
「ちょっとの辛抱ですから……すみません」

頭を下げられても、とミシャが思う一方、一団は彼女の手首を後ろでまとめて縛った。さらにウエストの辺りをぐるぐると巻きつけ、手首はおろか腕も動かせない状態にされる。
縄にはところどころに銀色の飾りが通されていて、そこからぶら下がった金属片が場にそぐわない澄んだ音を奏でた。おそらくは、儀式的な何かのためのものなのだろう。
結構容赦なく縛られ、胸が押されて息苦しい。
無理に後ろに回された腕や肩も痛む。

「おい、ネール……お前、これ」
「ね、ネールさぁん、どういうことなんですかぁ……？」
「……」

親友の問いに答えない司祭。もちろん、今にも泣き出しそうな魔女の問いなど、答えるわけもなく。ケガをした足を引きずる親友に肩を貸し、一段の先頭に立ってゆっくりと歩き出す。

こうしてミシャは、罪人のような姿で町に向かうことになった。

七話　魔女狩りの夜

誰かが泣いているんです。
ひざを抱えてないているんです。
誰なんでしょうね。
あれは、どこの誰なんでしょうね。
そんな風に思って眺めても、わたしにはわかっています。あの黒髪は『わたし』。ぐしゅぐしゅになった青い瞳も『わたし』。ひとりぼっちのあの子は、遠い昔にいた『わたし』。

――名前がなかったころの、アルテミシア。

わたしはずっと孤児院にいたのです。
名前がないころに、覚えてもいないころに捨てられていたのです。
要するに、赤子だったそうです。
全部、伝聞です。だって覚えていないから。いつもないている記憶しか、わたしには残されていないから。どこともわからない場所で、ひざを抱えて、ただただ泣いていたから。
他の子はみんな名前がありました。
わたしだけが、まだ名前が決まっていませんでした。
選びなさい、とシスターが言ったから。
でもわたしは名前って、何のことなのかよくわからなかったから。選ぶフリをして、ほったらかしていたんです。だって価値がわからなかった。それに意味があるのかわからなかった。
そのせいか、みんなには『名無し』と呼ばれてからかわれました。
だけど決められなかった。
思いつかなかったから？
やっぱり価値を見出さなかったから？

……もしかすると、負けたくなかったのかもしれません。捨てられた子はみんな、名前を書き添えられていたから。だから、自分でつけるのは何だか悔しかったのかもしれません。
そんなわたしに手を差し伸べてくれた、お師匠様。
強くてきれいな、優しい人。
愛情深い、厳しい人。

『お前には魔法の才能があるね』

お師匠様はそう言って、笑ってくださいました。
『どうだい？　アタシのところにこないかい？』
そう言って、手を差し伸べてくれました。
わたしは、わたしは、わたしは――。

○　○　○

懐かしい夢を見た気がする。
「……お師匠、様？」
ミシャは、目を覚ました。
硬い石の床に置かれた、実に質素な毛布の上で。
外はまだ薄暗い。朝、いや早朝だろうか。夕方かもしれない。町についてすぐ、何かの薬をかがされて眠らされてしまった。なので、時計がないと時間の感覚がわからないのだ。
窓は高い位置にあって、小柄なミシャでは立ち上がっても外は見えない。
「牢屋……だもんねぇ」

しばらく悪戦苦闘するも、疲れて座り込む。
無意識にポケットを探るが、やはり何も入っていない。
あの時計も、ない。
「お師匠様……」
昔のように、ミシャはひざを抱える。そこに顔をうずめ、小さくため息を零した。
魔法の訓練で失敗したとき、いつもミシャは物陰に隠れてこうしていた。恥ずかしいし情けないしで、昔のように一人で泣いていた。自分には才能なんてないと、痛感しながら。
師の弟子は、姉弟子や兄弟子は、みんなみんな優秀だった。
なのにミシャだけが、何をさせてもダメだった。
根気強く師が付き合ってくれたおかげで、人並みの魔女にはなれたと思う。だけど、あの魔女の弟子としては失格以外の何物でもなかった。絵に描いたような、失敗作だった。
なのに師はミシャを見捨てず、母のように姉のように大事に育ててくれた。
……だから、余計につらかったけれど。

その愛に答える術を持たないこと。
愛という名の期待にこたえられないこと。
自分のせいで、師が周囲に笑われていることも。

何もかもが辛くて痛くて、ミシャは故郷から飛び出した――いや、逃げ出した。
戻れないのではない。
戻りたくない。
今戻れば、師はさらに物笑いの種にされてしまう。シェルシュタイン一門に、その魔女ありと言われたあの人を、これ以上そんな目にあわせるわけにはいかない。

実力で何とかならないなら、消えるしか……。
「お師匠様。ごめんなさい、ごめんなさい」
ミシャは小さく、声を漏らす。
ここは罪人を入れる場所、すなわち牢獄。
牢獄に入ったものの運命など、火を見るよりも明らかだ。
ましてや自分がいたのは、そして連れて行かれたのは魔法嫌いの町。魔女のミシャは、どんな目にあっても不思議ではない場所だ。
気まぐれに飛び出した、バチがあたったのだ。
これからどうなるのかわからない。
ネールは、いったい何を考えているのだろう。
確か彼は『領主の館に行く』と言っていた。
……まさかここが、その館なのだろうか。それはさすがにないよね、と自らの考えを即座に否定するものの、場所がわからない以上は『絶対に違う』とは言い切れないと思う。
それに、ネールが言った手違いというのも気になる。
こうなることを、たぶん彼は想定していなかったのだろう。それが、何かあってこうするしかなかったと。……本人に聞かないことには、はっきりとはわからないのだけれども。
もう一つ気になるのはリオのことだ。
さすがに親友まで牢屋に入れてないはずだろう……と、思う。
適当に理由をつけて、被害者として仕立て上げられなくもない。その場合、ミシャのイメージはさらに悪いが、ケガ人がこんな場所に押し込められたら最悪の場合、足を失いかねない。
結局、考えても今できることはない。情報も何も入らないし、物音一つしない。風にこすれる葉の音がするだけだ。ミシャの周囲には人の気配が、感じられない。
考えれば考えるほど高まる不安に押しつぶされそうになるが、睡魔の前にはどうしても抗えず。ひざを抱えたまま、ミシャはまた眠りの中に落ちていった……。

八話　第三の選択肢

朝食は結構豪華だった。
少なくとも、山小屋での数日でミシャが食べていたものよりは。
薄味だか美味で、思わずほほが緩んでしまうほど。
食事が終わったら同年代の少女らに囲まれ、手首を縛られてから移動した。外が見えず場所はやっぱりわからなかったのだが、町の中心部らしいことだけは騒がしさなどでわかった。
そんな状態で移動した先は、牢獄と同じ建物にあるお風呂で。

『え、あ、あの、一人で洗え――』

というミシャの意見は完膚なきまでに無視され、服を脱がされ頭の上から足の先まできれいに洗ってもらった。縛られこそしなかったが、違う意味で縛られていたように思う。
それから町で見かけた、このあたりでは一般的な服を着せられた。ごわごわした、丈夫そうな生地で作られたワンピース。シックな花柄の生地と、ところどころに縫い付けられたレースがかわいらしい。なお、ミシャの服はどこかに持っていかれた。
何度か彼女らに話しかけようとしたが、それができない威圧感。
そして今度は手首だけを縛られた状態で、連行されたのは。
「……お屋敷？」
思わずつぶやいてしまうほどの豪邸。
掃除だけで一日が終わりそうなほど広大な庭を、ゆっくりと進んでいく。
きょろきょろ、とできる範囲で周囲を見回す。その限りでは、この屋敷が一番立派なつくりのようにミシャには思えた。だとすると、もしかしなくてもここが『領主の屋敷』なのか。

「お待ちしていました」

玄関にはネールと、教会の関係者が数人立っている。

ミシャの手首を縛っている縄の先は、少女らからネールへと渡された。何がどうなっているのかわからないが、ミシャはなじるように彼を睨んだ。

「……そう睨まれるとつらいのですが、もうしばらく我慢してください」

小声で苦笑され、ネールは背を向けた。

直後に扉がゆっくりと開いて、中に向かって歩き出す。そこはとにかく広い玄関で、突き当たりの窓の向こうには中庭らしき庭園が見える。花がたくさん咲いた、とても美しい庭だ。

部屋の左右には階段があって、吹き抜けになっている。

相当に広い場所なのだが、それを感じさせないほどに人がぎっしりと立っていた。

ネールに引かれるまま、ミシャは部屋の中央へと向かう。

「あれが魔女か」

「意外と若い娘だな……」

「いや、魔法で容姿を捻じ曲げているに違いない」

「あの姿で人々を油断させるのね……怖いわ」

そんな会話と、刺すような視線を向けられながら。

吹き抜けになった二階の中央は、そこから人々に語りかけるためなのか、わずかにせり出していた。そこからミシャを、睨むように見ている男性と、不安そうにしている女性がいる。

着飾った姿からして、あの二人が領主か何かなのだろうか。

「ご苦労だった」

「いえ」

男に向かって一礼し、ネールは甲冑に身を包んだ男――だと思わ

れるものに縄を渡す。どうやらここが目的地らしいのだが、何が始まるのかミシャにはさっぱりわからなかった。
ネールは何か考えがあるようだったが、とてもその流れには思えない。
なんというか、完全に『積んだ』感じしかしなかった。
「アルテミシアさん、こちらはランドール領主とその奥様です」
「はぁ……」
あの男女はやはり領主とその奥方らしい。
続いて、ネールはミシャが連行された理由を読み上げ始めた。
ミシャの罪状は特にないという。ただ、ミシャが自身を魔女と名乗ったことで町の住民の生活を脅かした、とか何とかで、こうして連行されたと言う説明をされた。
正直、意味がわからないという思いがあるが、素直に口にしたら袋叩きにされそうなのでおとなしく話を聞くことにする。さすがにこの状態で、自分の身を守れる気はしない。
「……というわけで、いかがいたしましょうか」
「ふむ」
「彼女から魔法の力を奪い去る処置も、できなくはありませんが」
「そのような方法があるのか？」
「えぇ、まぁ……多少時間はかかりますが」
――それは困るんですけど、とミシャは視線でネールに訴えた。
ミシャが人様に誇れる技能は魔法しかない。他は人並みか人並み以下だ。裁縫も穴を繕うことはできるが物が作れるわけではなく、料理も売り物になるようなものは作れない。
魔法がなくなったら生きていけないうえに、故郷に帰ることもできない。
「ただ、その場合は彼女の町への移住を認めていただかないと。まさか彼女の生きる術を奪っておきながら追い出すような、人ならざる非道な真似はいたしませんよね？」
「……それは」

「町のかたがたの認識はどうであれ、世間一般では魔法とは専門的な技術の一つ。彼女は幼いころからその技術だけを磨いてきた方だ。彼女から魔法を奪うのは、生活の術を奪うこと」
ネールはまっすぐに、領主を見上げて言う。
「領主様、ご決断を……彼女をそのまま追い出すか、彼女から魔法を奪う代わりに町への定住を認め、ある程度の世話をするか。どちらにせよ町から魔女はいなくなります」
彼の言葉に領主は、悩むように目を閉じる。
その間、周囲からは『第三の選択肢』が叫ばれ続けた。

――魔女を火あぶりにしてしまえ！

ミシャの周囲には甲冑姿の人が並んでいる。その向こうに罵声を上げる町民がいる。彼らが投げるゴミやら石ころは、甲冑の壁の前にはじかれているので、ミシャは安全だ。
だが、甲冑が鳴らす音がだんだんと大きくなってくる。
ガツンガツンという、恐ろしい音が増えていく。
ミシャは思わず座り込んだ。
腕が自由なら迷わず耳をふさいだだろう。聞きたくない、怖い。火あぶりにされるのも充分すぎるほどに怖いけれど、この音や罵声の方が今はずっとずっと怖かった。
彼らの声はミシャを罵るだけにとどまらず、領主夫妻への嘆願へと変化していく。
断固として魔女を排除し、力を失ったとしても町に入れるなと。
さすがの騒ぎに、ネールの表情も曇ってきた。
もしかすると、彼は領主夫妻とミシャを直接引き合わせたかったのかもしれない。ランドールを出るにせよ定住するにせよ、ひとまずは領主に話を聞いてもらうなどするつもりで。
だが『手違い』があった。

これはミシャの予想だが……きっと、町の人々にバレてしまったのだ。あのようにミシャを魔女として連行するしかなくなって、そしてこんな大騒ぎになってしまって。

そして今、領主は人々の勢いに押されつつあった。

「やむを得ないが、魔女には消えてもらわなければ……」

「領主様、それは……！」

「ネール。いかにお前があのエリオット司教の息子であろうとも、そしてわが息子の友人であろうとも……こればかりは特別扱いはできぬ。この町には魔法もそれを使うものも要らぬ」

ミシャの目の前で領主は小さくつぶやき、ネールが悔しげに歯を食いしばる。

「おまちください！」

そこに飛び込んできたのは青年だった。

長い髪を後ろへ撫で付けた、いかにも貴族といった服装の青年だ。そして、外見通りの身分らしく、あれほどひしめいていた人々は彼のために道を譲る。

できた道を、彼は小走りに進んだ。わずかに片足を引きずるようにして。

近づくとだんだん、彼の容姿が見えてくる。

――視線が合った。

その瞬間、ミシャはつぶやく。

「リオ、さん……？」

あの粗暴そうな格好からは想像しがたい、リオ・カーティスがそこにいた。

九話　魔法嫌いの町の魔女

現れたリオはミシャのそばまで歩いてきた。
……本当に彼はリオなのか、という思いがミシャの中にある。
そこにいたのは育ちのよさそうな青年で、あのリオとイコールで結べない。恐ろしいほどよく似た他人ではないか、という疑いがぬぐいきれなかった。
だけど声も、引きずる足も、彼がリオだと言うことを伝えてくる。

「ネール、これがさっき届いた」
「これは……」

リオは懐から白い封筒を取り出して、どこか安堵した様子のネールに渡した。
見る見るうちに、ネールに笑みが浮かぶ。
座り込んだミシャの位置からはわからないが、二種類の紋章のハンコが押されている。そのうちの一つは、どこかで見たような形をしているように思った。
だがそれを確かめる前に、封筒はミシャの位置から見えないところにいってしまった。
次にリオは上を見た。
突然の乱入者に唖然としている、領主を。

「リオ、お前は今までどこにいたのだ！　昨日は帰ってこないし、心配したのだぞ！」
「どこも何も、彼女の家ですよ父上。山の中でケガをし倒れていたのを、たった今、あなたが処刑しようとしたこの『魔女』に救われただけの話です。まぁ、昨日は教会にいましたが」

領主――父親の言葉に、さらりと答えてみせるリオ。
これには周囲も驚いたのか、リオとミシャを交互に見る視線をいくつも感じた。
ふと、ミシャは以前聞かされた『魔女のイメージ』を思い出す。とにかく悪そのものといったイメージから、リオが語ったミシャ――魔女の行為は、とてもじゃないが繋がらない。
もしかしたら悪い人じゃないの、という雰囲気がかすかに漂い始めた。
追い討ちをかけたのは、手紙を読んでいたネールの言葉だった。
「ここにはメルフェニカ王族の紋章と、シェルシュタインという魔法使いの一門の紋章が並んで押されている。これは、両者が深い関係にあることを意味しています」

懐から懐中時計を取り出すネール。ミシャが師からもらった、例の懐中時計だ。どうやら彼が持っていてくれたらしい。捨てられた可能性も考えたミシャの視界が、少し潤んだ。
「これは彼女の持ち物で、一門の紋章があります」
「だが、時計など何の証拠にもなるまい」
「そうです。しかしシェルシュタイン一門に連絡を取るに値する理由にはなる。そちらの紋章が刻まれた懐中時計を持つ魔女が、このランドール領にいるがどういうことだ……とね」
次にネールは封筒を掲げる。
そこには差出人の名前がきれいな文字で、流れるように綴られていた。
「手紙の差出人はミレアナ・シェルシュタイン。メルフェニカの宮廷魔女を務めていらっしゃる彼女が、このアルテミシア・シェルシュタインの後見人になるそうです」
ミレアナ、という名前にミシャは目を見開いた。それはミシャの憧れの姉弟子。オチコボレの妹弟子を引き取るとまで言ってくれた、

やさしい魔女の名前。

聞けば、ネールはミシャの名前を聞いてから、知り合いに手紙を送ったそうだ。その知り合いは現在王都の、王城内にある教会にいて、宮廷魔法師や宮廷魔女ともよく話すのだという。

その知り合いを通じてミレアナに連絡を取って、手紙を送ってもらったのだ。

シェルシュタインの名前を持つ魔女が、よりにもよってランドールにいますよ――と。

リオはネールから手紙を受け取り、それを持って両親のもとへ向かう。すぐに戻っていく彼の背後で、領主は妻を呼び、夫妻で手渡された手紙の文面を読み進めていく。

だんだんとその表情がこわばってきたのが、ミシャにはわかった。

リオはどこからか取り出したナイフで、ミシャの手首を戒める縄を切る。こすれて赤くなった手首を、ミシャは何度かさすった。幸いにも赤くなっているだけで、ケガはないようだ。

「まったく、もっと早く登場してほしいものです」

「肝心の手紙が届かなかったんだよ」

いつも通りの口調に戻り、リオは腕を組んだ。

どうやらこの粗暴で口の悪い方が、本来のリオの姿らしい。

最後にリオは、手紙を手に顔を見合わせている両親に向かって、そして集まった住民一人一人に言い聞かせるように、大きな声で言った。静かな室内にその言葉はよく響いた。

「まさか宮廷魔女と戦うなどと、ふざけたことを言うつもりではありませんよね」

宮廷魔女とは、時に国の代表として他国に出向く要人だ。

それに楯突くということは、つまりこの国そのものに楯突くにも等しい。領主は息子の言葉に無言で返事をし、人々は唖然としたま

ま、騒ぎは収束へと向かっていった。

○　○　○

――その夜。

「今日は教会にお泊りですか……」
「ええ。前に使った部屋を、そのまま使ってください」

ミシャはネールにつれられて、教会に戻っていた。外はもう真っ暗で、小屋に戻るのは危ないと言う判断からだ。服などの荷物も無事に返してもらえて、何とか一安心という感じだ。

今は少し遅めの夕食をとっているところ。

「それにしても、まさかリオさんが領主様の息子だなんて思わなかったです」
「乱暴ですからね、リオは」
「……わるかったな、らしくなくて」
「っていうか、お家に帰らなくてもいいんですか？」
「いいんだよ」

どうせ今頃大騒ぎだ、とスープを酒のように煽るリオ。格好はまだ整ったままだが、口調やしぐさは完全に崩れていた。黙っていれば、という思いがミシャの中に浮かぶ。

食事の内容はかなり質素というか、シンプルだ。

いろんな野菜をじっくり煮込んだスープに、近くの川で取れた魚を焼いたもの。魚はハーブとバターのよい香りがして、火で軽くあぶったパンとの相性がいい。

ちなみにリオは酒――葡萄酒を要求したが、ネールの冷たい笑顔

の前に却下された。

「まぁ、何とか第一関門は突破、というところですね」
「火あぶりだけは回避できたしな」
「前途多難ですよね」
何とか火あぶりと追放だけは回避したが、課題はまだ残る。
住民の中にある魔法への不信感はすさまじい。ミシャは初日以上に、今日、それを痛感したところだ。シェルシュタイン一門と姉弟子の威光で、ひとまず何とかなっただけなのだ。
これからミシャは、町に家を貸してもらうことになっている。
そして、ここで暮らしていく。
できれば庭が広いところがいいという注文は、どの程度叶えられるだろう。ハーブ類は自宅栽培した方がいいので、できれば畑を作るスペースがほしいのだ。
「でもお前、どうするんだよこれから」
「そうですね……できれば魔法で、人の役に立ちたいです」
「つまり人助けをしたい、ということですか」
ネールはパンをちぎりつつ呟く。
「教会にはそういう、困った相談事と言うのが舞い込むのですが、それに魔法などで対処するというのはどうですか？　まぁ、大半が魔法を使うまでもないものばかりですが」
「酒場なんかにもそういうのがあるよな。あっちは冒険者みたいなの向けの、結構荒っぽいのがほとんどだって聞くけど。最近やってくれるやつがいないって嘆いてたぜ」
「荒っぽいのはちょっと……」
ミシャは答えつつ、そういう場所があることに感謝していた。
そういう依頼だったら、自分でも何かできるものがあるかもしれない。
魔女が町のためにがんばったら、少しは魔法へのイメージが変わるだろうか。ほんの少しでもいいから、魔法使いだからと追い回さ

れたりするようなことが減ってくれるだろうか。

自分のようなオチコボレでも、何かの役に立てるなら――。

「わたし……魔女になります」

「もう魔女じゃねぇか」

「違います。今はシェルシュタインの魔女です。だからわたしは、助かったんですけど」

だけどそれはミシャが認められたからじゃない。

魔女が、魔法が認められたわけでもない。

ただ、各国の要人と通じるシェルシュタイン一門への畏怖、恐怖がそうさせただけ。シェルシュタインの名を持つ魔女を火あぶりになどすれば、どんなことになるかわからないから。

「だからわたし、魔女になるんです」

アルテミシアという魔女になりたい。

シェルシュタインという、家名に頼らない魔女に。

魔法嫌いの町にいることを許された、そんな風変わりな魔女に、なりたい。

それがミシャの、アルテミシアの願いになった。

一話　踊り羊亭

町外れの、庭がそこそこ広い小さな家。
そこがミシャの新しい家だ。
例の騒動の次の日、ネール以下教会の力自慢の男性陣に、小屋の中の荷物――主にあのテーブルを運び出してもらったのだ。使ったものが使ったものなので、捨てるにはもったいない。
半日ほどかけて移動し、とりあえず家まで運び込んだ。
ミシャはその間、長く使われていない家の中を必死に掃除していた。とりあえずすぐに使う場所――キッチンや寝るところを中心に。数日かけてきれいにしていくつもりだ。

「よいしょっと」

ゴミを家から引っ張り出して、庭の片隅に積んでいく。こういうのを回収する仕事をしている人がいるらしく、後で地域ごとに定められているゴミ置き場へと持っていくのだ。
家の中は大体片付いてきて、テーブルもすでに運び込まれている。畑として耕すために柵で囲ったスペースは、まだ雑草が茂っているけれど、いずれそこそこ見栄えのいい畑にする予定だ。少しずつ、この場所はミシャのアトリエになっていく。
彼女が、長く暮らしていく場所に。
魔法使いの住まいは、一般的にアトリエと呼ばれることが多い。
大昔に、芸術と同じような意味合いで扱われていた名残だそうだ。当時は魔法はまだ未発達のところが多く、魔素という便利なものも存在しなかった。
魔石は宝飾品としても重用されていて、つまり金持ちの道楽だったのだ。
そういうこともあってか、当時の魔法のほとんどが金持ちが喜ぶ

ようなもので、同じような立ち居地にいた芸術関係と一緒くたにされていたという。
その後、魔法の研究は進み、道楽から技術へと変化したが、そういう部分がそのまま残ってしまったようだ。ミシャは工房よりオシャレで、残ってくれてよかったと思っている。

「……これで環境が少しでも変わっていればなぁ」
家の中で小さくつぶやく。

窓からこっそりと外を覗くと、近所の家の硬く閉ざされた窓やカーテンが目に入った。
まだ、住民は魔法を受け入れてくれていない。
もろもろの事情から、ミシャがこの町にいることだけは、渋々認めてくれた。店に行けばそれなりに会話も弾む方だし、買い物もできる。前のように逃げられたりはしなくなった。
でもわかっている。
それは、恐怖からだと。
彼らはミシャを、魔女を受け入れたのではない。
「今日も明日も、がんばるぞ……」
だからミシャはグっと手を握り、言い聞かせるようにつぶやいた。
そのための手段ならある。あとはどれだけミシャが、彼女の魔法が答えられるか。彼女はテーブルの上にある一枚の紙切れを手に取った。そこには、簡潔に内容が書かれている。

――依頼書、と。

○　○　○

昼過ぎのことだ。
遅い昼食の準備をしていたミシャのところに、リオがやってきたこう言った。
「今から酒場にメシ食いに行くぞ」
「……はい？」
午後からは早速畑を作ろうと思っていたミシャは、いきなりの誘いに唖然とする。
こんにちはなどの挨拶も何もなく、いきなりだったからなおのこと。かろうじてまだ作ろうとしていたところだったからよかったが、これで食べている最中だったら大変だった。
「あの、いきなり行くぞと言われましても」
「いいからいいから。さっさと身支度してこいよ」
……まるでミシャの話を聞いていなかった。
そういういきさつで、ミシャはリオと共に酒場にやってきた。
領主の息子と一緒だからなのだろうか、以前ほどは露骨な監視する視線はそう向けられなくなった気がする。ただ一人になったときの反動が、ミシャは少しだけ怖かった。
物語だと、一人になった瞬間取り囲まれたりするものだ。
女性はそれなりに恐ろしい。さすがに数人の女性に取り囲まれたりしたら、挙句に殴るけるなどをされてしまったら。ミシャには護身術などないし、されるままになってしまうだろう。
怖いなぁ、と想像に震えつつ、ミシャはただリオについていくしかない。
町の大通りに出てしばらくまっすぐ進み、途中で入り組んだ細い道に入る。この辺りは地域の住民が使う商店が多いようだ。かわいらしいアクセサリーに、少し目を奪われそうになる。
「余所見してるとおいてくぞ」
「は、はい……」

そのつどリオに睨まれ、慌てて追いかけた。

それを何度か繰り返しつつ、たどり着いたのはきれいな店舗の前。見た目はオシャレで喫茶店のような感じだ。実際、昼からも営業しているらしく、その時はカフェということになっているのだと言う。近所のご婦人や若い娘の、憩いの場だとか。

オープンカフェにはデート中なのか、若い男女が目立つ。自分たちの世界に入ってしまっている彼らは、ミシャの存在には少しも気づかない様子だ。幸せそうでちょっと羨ましい。

「ここはこの町の名物なんだよ」

「へぇ……」

踊り羊亭、という名前のこの店は、立ち寄っただけの旅人もやってくる。

もちろん町にある宿の宿泊客も、地元の人間もだ。

ここにあるのはうまい料理とうまい酒、そして――情報。時には領主や教会以上に情報が早く多く集まることもあって、何かしらの『依頼』も持ち込まれるそうだ。

教会にも『依頼』というか頼みごとは舞い込むそうだが、そっちは子守だとかペットの捜索だとか、実に穏やかなものが多い。酒場の場合は人探しや……山賊の討伐などが多いという。

「ま、今のお前じゃここの依頼の役には立たないだろうさ」

「じゃあ、何でつれてきたんですか」

「顔見せだよ。いずれ情報を求めてここにくるかもしれないだろうし、できるだけ味方は多い方がいい。俺やネールが、いつでも助けられるとは限らないわけだからな」

「はぁ……」

「ここのマスターは気のいいおっちゃんだ。頼りになるぜ」

からんからん、とベルを鳴らす扉を押し開く。

昼ご飯時を過ぎた店内は、少しだけ閑散としていた。それでも子

供をつれた若い夫婦や、祖父母らしき老夫婦が孫と一緒に、ケーキやら料理やらに舌鼓を打っている。
酒場と言われても信じられないほどきれいな店内に、ミシャは思わず唖然とする。
店の中央には、かわいらしい制服を来たウエイトレスが経っていた。

「いーらっしゃいまっせー！」

くるり、とスカートをヒラヒラさせながら、ウエイトレスが振り返った。
こげ茶色の髪を長く伸ばし、二つに分けて左右の高いところでまとめている。ミシャから見ても充分にかわいらしい格好の彼女は、にっこりと満面の笑みを浮かべて。

「ようこそ！　踊り羊亭に！」

と、言った。

二話　友達

ランドールにはいろんな系統の料理がある。
それだけ、いろんな味覚の人が集まる場所ということなのだろう。

「おいしいです……！」

ミシャは今まで食べたことがない料理に、感動していた。
香辛料やにんにくが利いた、少しピリっとしたトマト風の煮込み料理。ウエイトレス曰く数日じっくり煮込んだ鶏肉は、噛む必要がないほどにトロトロだ。
ミシャの故郷では一般的で、メルフェニカではあまり食べられない白米も、この店にはしっかりと用意されている。食べたことがない料理は、しかしその白米と実に相性がよかった。
数種類のチーズをつまみに葡萄酒を飲むリオの前で、ミシャは乙女の恥じらいなど投げ捨ててひたすら料理を胃袋へと押し込んでいく。すでに一度白米をお変わり済みだ。
「お前……意外と、食べるんだな」
「んく、魔法って結構体力使うんですよね……」
結構大食いの人多いんですよ、とミシャは水を飲み干す。ここ数日、質素な食生活だった反動なのか、まるでカラカラに乾いた大地が水を吸い込むように胃袋は食べ物を受け入れた。
それをウエイトレスは、誇らしげに眺めている。
「いやー、そんなに食べてもらうとマジうれしいわぁ」
「お前が作ってるわけじゃないだろ」
「でもご飯を仕入れろってマスターに言ったの、あたしだもの」
と、ウエイトレス――ジュジュは、腕を組んでフフンと笑った。
ミシャより一つ年上の十七歳のジュジュは、数年前からこの店で働くベテランだ。このランドールで生まれ育ったが、魔法に対する

偏見などはほとんどないらしい。
むしろ軽く憧れすらあるらしく、旅人から話をせがんだりしていたという。

「魔女ってこんなに可愛いのねー、うふふふふふ」
……若干、不気味な笑みを向けられているのは、きっと気のせいだ。

「でもミシャ、あなた人間でよかったわよねー」
「そうですか？」
「だって、妖精種とかエルフ種だったら……もっとひどいことになってたかも。あの辺りは魔法が使えて当たり前って血統だしね。だからほら、店の中にいないでしょ？」
みんな嫌がるのよ、と困った様子でつぶやくジュジュ。確かにそれなりに人がいる店内なのだが、妖精種らしき小さな姿も、エルフ種らしき垂れ気味の長い耳を持つ人もいない。
一応、妖精種はヒトの姿にもなれるそうだが、彼らは生まれつき薄い青や緑といったパステルカラーの髪や瞳なので、黒や茶系ばかりの中にいれば一発でそうだとわかる。
「旅人は分け隔てなくお持て成ししたいんですけどねー」
金属製のトレイをくるくる回しつつ、ジュジュはため息をこぼす。
彼女なりに町の現状を案じているようだ。

「……おい、こいつに同情なんてすんなよ」
しかしリオははき捨てるように。
「エルフ種は長寿だからなのか、やけに羽振りのいいのが多いんだよ。つまり、カモだ」
「カモとは失敬な！　鶏ガラもしくは七面鳥だよ！」
「似たようなもんだろ……」

「えー」
ミシャの前で二人は、ずいぶん楽しそうにやり取りしている。
聞けば二人――そしてネールは、教会で一緒に遊んだ幼馴染とのこと。
「ネールの妹がこいつの友達なんだよ。その絡みってだけだ」
「へぇ……妹さん、いたんですか」
「今はどっか遠くで一人暮らししてるんだっけか。よかったなお前、あいつがいなくて」
「はい？」
「いたらよくて町から追放、最悪火あぶりっていうか首をスパーンだな」
と、リオは手で首をはねる動作をしつつ笑う。
いまだあの時の恐怖が抜けないミシャは、少し涙目になってしまった。あのネールの妹がいるだけで、というのが一番きたかもしれない。火あぶりどころか首を……とは。
「もー、リオ兄さんってば、女の子泣かせるなんて最悪」
よしよし、とジュジュがミシャの頭をなでた。
「ネール兄さんの妹はカレン・エリオットって名前で……その、この町でも類を見ないぐらいの魔法嫌いなんだよねぇ。ネール兄さんは、魔法に対して友好的っていうか好意的だけど」
だからなのよー、と苦笑する。
魔法に憧れているジュジュに、魔法嫌いの友人がいるとは想像しがたい。
「あー、うん。魔法に興味あるとか言ってないしね……」
面倒なことになるもん、とため息。
ネールの妹とやらは、いろいろと過激な少女らしい。だから彼女がこのランドールを離れる時に、周囲はとても心配したそうだ。彼女を、ではなくその周りの誰かを。

メルフェニカ国内において、魔法とは生活の一部。

その中で、ランドールはかなり特殊な土地だ。

魔法嫌いの彼女が、あふれる魔法に過剰反応しやしないか……と。それで本人が痛い目を見るのは自業自得なのだが、その暴走に巻き込まれる人がいるのは好ましくはない。

幸いにも、これまでその類の話はないそうだが。

「それまでに町が少しでも、魔法を受け入れてくれればね。今のままじゃ、カレンが戻ってきたら即『前の騒動』がぶり返しちゃう。カレンお子様だから、今回と同じ手は通じないかも」

はぁ、と何度目かのため息をこぼすジュジュ。

明るい性格の彼女だが、いろいろと気苦労が多いようだ。ため息ばっかだと幸せが逃げてしわが増えるぞ、というリオの冗談にトレイによる一撃を返していたので、元気なのだろうが。

その後、リオとジュジュの言い合いが始まったり、挙句ミシャまで巻き込まれたり、筋骨隆々のマスターに三人セットで怒られたりと、散々な目にあったのだが。

「依頼も入ったし……まぁいっか」

逃げるように駆け込んだ教会で渡された依頼書。

魔法を使うようなものではないが、初めてのお仕事だ。

何よりも、ジュジュという同年代の同性の友人ができたのが一番うれしい。もちろんリオやネールの協力もありがたいし、別に彼らに不満があるわけではないのだけれども。

やはり、同性としか話せない事柄もあるわけで。

三話　初めてのお仕事

戸締りはしっかりとした。
荷物も持った。
ミシャは一つ一つ、確認しながら指折り数え。

「……よし、しゅっぱーつ」

自宅に背を向けて、町へ歩き出す。背中には大きなリュックを背負い、手にはつる草で編んだ籠。どこかに旅にでも行くかのようないでたちで、ミシャが向かうのは近くの森だ。
最初のころに住んでいた森――山とは、町を挟んで反対の方向にある。
そこに果物を取りにいくのだ。
教会でネールに一緒にどうですかと誘われた依頼。それは町にある菓子店からの、急を要する依頼だった。どうやら、いつもの仕入れルートが使えず、菓子の材料が足りないのだとか。
幸いにも小麦などは何とかなったが、遠方から仕入れている果物が手に入らない。
ランドール周辺に果樹園はなく、森の中で探し回るしかなかった。
そこで依頼が教会に持ち込まれた、というわけだ。

これはミシャ個人への依頼というより、教会の仕事を手伝う感じだろうか。町の入り口でネールたちと合流し、馬車で一緒に森へ向かうことになっている。
ただの手伝いじゃねえかとリオは渋い顔をしたが、ミシャにとってはこれも依頼だ。
満足な給金が出なくとも、こういう些細なことから信用を得なければならない。そしていつかはアルテミシア・シェルシュタインへ

の依頼、というものを請け負えるようになりたい。
これはそのための最初の一歩。
「がんばるぞ……」
ミシャは気合を入れるように、ぐっと手を握った。

○　○　○

草を掻き分ける。
ひたすら、目当ての品を探す。
だが、指先が泥や土にまみれて黒ずんでも、探しているものは手がかりすらない。疲れたミシャが寄りかかった大木は、確かに甘い果実を実らせるもので、実る時期のはずなのに。
「おかしいなぁ……」
事前に書物で勉強した限り、ここで見つからないというのはありえない。
仮に獣に食われていたとしても、その残骸が残っているはずだ。周囲にそれすらも無いということは、もしかすると旅人か何かが売買目的で根こそぎ採っていったのだろうか。
なお、ここは個人所有の果樹園の類ではないので、それ自体は罪ではない。
ないのだが、こういう時は何ともいえない気持ちになってしまう。
「こっちには無いぞー！」
「こっちもだ！」
周囲に散らばった他の人々も、次々に空振りの報告をあげる。
この様子だと、この辺りにも果物は無い、と判断せざるを得ない。
ミシャだけでなく、他の人々もだいぶ疲れが着ている様子だ。中に

は木に登ってまで探した人もいる。
「やっぱり前の寒波が……」
「だなぁ」
近くに腰を下ろした中年男性二人が、ため息混じりにぼやいた。
ミシャがランドールに来る少し前、この辺りは季節外れの寒波に見舞われたそうだ。一週間ほど雪の季節のように冷え込んで、作物がだいぶ傷んでダメになったという。
ダメにならずとも収穫時期がずれ込むなど、いろいろ大変だったそうだ。
その影響が、こうしてまだ残っている……のだろうか。
もしもそうだったなら、探すだけムダではないか、という気がする。実る時期がずれ込んでしまったなら、この木々が果実をつけるのは当分先になる可能性が色濃い。
何よりも、花すらついていないのだから……。

「でも、何とかならないかなぁ……」
果物が見つからないと、お店の人はとても困る。そして、お店の人が作るはずだった商品を楽しみにしている、お客さんも困る。それは、とても悲しいことだ。
ミシャは籠を抱えて立ち上がり、さらに森の奥へと進んでいく。きっと、どこかに一本ぐらいは空気を読まず、果実をつけている木があるはずだ。これだけ広い森なら、きっと。
途中、休憩中の人々とすれ違う。
彼らは森の奥へ奥へと進むミシャを少し視線で追いかけ、しかしすぐに目を閉じた。すでに数時間ほど探し回って、みんな疲れきっているからだ。けれどミシャは必死に、奥を目指す。
「……った」
とがった枝の先端で肌を切る。手当てするほどでもない擦り傷なので、無視する。ぱきんぱきん、と乾いた枝を踏み折りながら、ミシャは薄暗さを増していく森をひたすら進んで。

――かすかに、甘い香りがするのに気づいた。

足を止め、犬のようにスンスンと鼻を鳴らして方向を探す。香りはかすかにそよぐ風上、ミシャから見て右の方角からしていた。花の香りかもしれないが、確かめないと。

もしかしたら、果樹の花かもしれないのだから。

そして身の丈ほどある草の壁を、片手で掻き分けぬけた先。

「あ……！」

赤い果実をつけた、木があった。

森の奥にしてはやけに日当たりが行き届いた、ぽかぽかと暖かい場所。これはミシャにしかわからないが、かすかに精霊が集った気配が残っている。ここは彼らの通り道のようだ。

そういう場所は、自然が豊かであることが多い、と書物にはあった。

一歩踏み出したミシャの足元で、きらりと光るのは魔石の粒。

それも、たくさん。

「わぁ……」

思わずそれらを拾いそうになり、慌てて今回の目的を思い出す。

あらかじめ渡されていた笛を吹き鳴らし、発見を知らせた。

草まみれになりながら現れた人々は、大喜びで果実の収穫にいそしみだす。もっとも、ミシャは疲れがどっと出てしまったのか、ぺたんと座り込んで動けなくなってしまったが。

情けなく思うミシャに、人々は次々と感謝の言葉を向けた。

それがくすぐったくてうれしくて。

あぁ、この言葉や笑顔をもっと聞きたいし見たいなぁ、と心の中で思う。

日当たりもいいしここで休憩して戻ろうという話になり、ミシャのそばでは食事の準備も始まった。それが出来上がるころには、おそらくミシャも動けるようになっているだろう。

「アルテミシアさん」

そこへ、ネールが紅茶が入ったカップを手にやってくる。

「お疲れ様でした。これで一歩前進、といったところですね」

そんなねぎらいの言葉に、身体の疲れなどすっかり消えうせていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0486y/

ランドールの魔女

2012年1月6日06時48分発行